

イタリア・ゴシック彫刻の開祖ニコラ・ピサーノが説教壇を 1268 年に設置したシエナ大聖堂では、正面壁のドラマチックな彫刻群が息子ジョヴァンニにより 1284 年以降 15 年にわたり制作された。シエナ派絵画の長たるドゥッチョがその地位を確立して行く時期でもありやがて 1300 年代に入ると絵画的特色を發揮するいわゆる「シエナ派彫刻」の潮流がティエノ・ディ・カマイーノやガーノ・ディ・ファーツィオにより推進されて行った。彼らと相前後しシエナで活動を展開、やがてトスカーナのみならず北イタリアでも魅力的作品を生み出した彫刻家が、今日関心と評価の高まりつつあるマルコ・ロマーノであり、作品の彼への帰属も続いている。筆者はこの度個人コレクションに高さ 85.5 センチおよび 84 センチの、長く波打つ頭髪、瓜実顔で瞑想的、切れ長のまなざしからなる丸彫り大理石製の「大天使ガブリエーレ」と「告知されるマリア」、すなわち「受胎告知彫刻群」を発見し、様式的に流麗かつリアルで生き生きした 14 世紀シエナ派彫刻の、中でもとりわけ大理石面を丹念に磨きかけ、柔和で光豊かな効果を堂々たる記念碑性追求への武器としたマルコ・ロマーノの芸風に通じるものを見、直ちに魅了された。しかしとりわけ「マリア」のコスチュームの襟の開口部が既に広く、鎖骨の露出を際立たせている点、並びにシモーネ・マルティーニやリッポ・メンミ派、アンブロジーヨ・ロレンツェッティ等の 1340 年代の受胎告知画で「大天使ガブリエーレ」が新出大理石像のごとく、左の手の先端が右の腋の下に達する事例がある点等への考察により、同大理石彫像群をマルコ・ロマーノによる今日までその活動について学界が決して問うことのなかった 1330 年代前半の作と結論付けるに至った。

彫刻家マルコ・ロマーノ研究の出発点は 1951 年、ピエトロ・トエスカが「イル・トレチェント（1300 年代芸術）」で、ヴェネツィアの聖シメオーネ・グランデ教会内の「1317 年マルクス・ロマヌス作」との碑文を背にする堂々たる預言者シメオーネ横臥像をマルコ・ロマーノ作として認定し、写真付きで取り上げたことにある。そして今なお同彫刻は古文書の裏付けをもってマルコ・ロマーノの作であることを証明できる唯一のものであり、マルコ・ロマーノの基準作である。それから 30 年以上経た 1984 年、ジョヴァンニ・プレヴィターリはシエナ大聖堂正面壁裏の大理石製四胸像およびニライオン像、クレモーナ大聖堂正面壁前、プロティロ上の三大理石彫像「聖母子、聖イメーリオ、聖オモボーノ」、カーズレ・デルサのコッレジャータ教会内大理石製ポッリーナ記念碑、これらにヴェネツィアの預言者シメオーネ像と共通する様式特色を認め、マルコ・ロマーノに帰属させた。その際プレヴィターリは三か所に離れたそれぞれの彫像群がいずれもマルコ・ロマーノによって制作されたこと背景には、カーズレ・デルサの名士ポッリーナの弟で 1290 年代初めシエナ大聖堂参事会員であり、1295 年に新法王ボニファーチョ八世付き職員としてローマ

に赴き、翌年法王によってクレモナー司教に任じられたラニエーリ・アルベルティーニの力が大きく介在した筈であるとし、その説得力によりマルコ作品のカタログは正当に拡大するに至ったのである。以後バンニョーリによりカーゾレ近くのラーディ・ディ・モンターニャの木製十字架像と昨今カーゾレ市に買い取られ同市美術館に収められた個人蔵の小アラバスター製老人像頭部がマルコに帰属され、またヴァレンツァーノおよびズリアーニによりヴェネツィアの聖マルコ教会の大理石製「受胎告知」彫像群が1317年の預言者シメオーネ像制作後のマルコ・ロマーノ作品とされ、いずれもカーゾレで行われた2010年のマルコ・ロマーノ展のカタログで権威付けられるに至った。かくしてローマ出身ながらシエナを皮切りにクレモナー、カーゾレ・デルサ、ラーディ・ディ・モンターニャ、ヴェネツィアを転々とした「放浪の彫刻家マルコ・ロマーノ」という捉え方、そして「1290年代のシエナでのデビューに始まり、最後は1320年代初頭までのヴェネツィア滞在で終わる」というマルコ・ロマーノ像がもはや今日定着しているのは事実である。

そうした中本論考では新知見として、彫刻家マルコ・ロマーノのデビューたるシエナ大聖堂正面壁裏の六作品について、恐らく1300年の大聖年を記念したシエナ大聖堂正面壁中央表門上のティーノ・ディ・カマイーノらによる彫刻的荘厳化を裏側でも反映しようとしたものとして把握し、その制作をプレヴィタリの見方より5年ほど遅らせて1301年頃とした。そしてクレモナー大聖堂前の三作品の制作時期についても在来の1297-8年説から10年ほど遅らせ1308年頃とした。しかし何より強調したかったのは、死亡年、死亡地の知られていないマルコ・ロマーノの最終活動地がこれまで1320年代初頭のヴェネツィアとされてきた点を抜本的に正す、1330年代前半のマルコ作とみなすべき大理石彫像グループ「受胎告知」を分析し、同作がシモーネ・マルティーニやアンブロジーヨ・ロレンツェッティ等へ影響した点を見逃し得ないことからしても、それが当時シエナに設置されたマルコの重要作品であり、彼が北伊滞在後の晩年、かつてのデビューの地シエナに再び招聘され、その喜びといわば最長老格の彫刻家の自負のもと、豊富な芸術体験を集大成、新たなみずみずしい創造意欲にも恵まれ実現した稀有なる作であるとし、在来からの彫刻家マルコ像に一段と幅と奥行きを与えんとしたことである。この崇高、神秘的な「受胎告知」の不可思議な静けさ、充実感は、真正の芸術家マルコ・ロマーノが極めんとした理想美の世界について恐らく物語るものであろう。